

## 独立教会の建設について

2024年11月18日 東京中会伝道協議会 三好 明

はじめに

- 1998年10月 志木北伝道所の牧師として赴任。  
私立志木幼稚園の園舎で10名くらいの教会員が礼拝をささげていた。
- 2001年 幼稚園跡地のうち103㎡を購入、教会堂兼牧師館を建築。
- 2002年 教会堂の献堂式 現住陪餐会員が9名で約3千万円の借入金。  
毎週礼拝後に教会独立のために祈ることを始めた。
- 2024年4月 志木北教会建設

### 1. 教会の自給（セルフ・サポート）について

パウロは伝道をした町々で「弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた」（使徒 14:23）

教会が成長するにつれて、長老たちの中でも特に賜物のある長老が、御言葉と教えのために特別に立てられるようになった。「よく指導している長老たち、特に御言葉と教えのために労苦している長老たちは二倍の報酬を受けるにふさわしい、と考えるべきです。聖書には、『脱穀している牛に口籠をはめてはならない』と、また『働く者が報酬を受けるのは当然である』と書かれています」（一テモテ 5:17-18）

キリストは七十二人の伝道者を遣わすに際して、受け入れられたところで「その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである」（ルカ 10:7）と教えた。

「脱穀している牛に口籠をはめてはならない」（申命 25:4）

「そもそも、いったいだれが自費で戦争に行きますか。ぶどう畑を作って、その実を食べない者がいますか。羊の群れを飼って、その乳を飲まない者がいますか。わたしがこう言うのは、人間の思いからでしょうか。律法も言っているではないですか。モーセの律法に、『脱穀している牛に口籠をはめてはならない』と書いてあります。神が心にかけておられるのは、牛のことですか。それとも、わたしたちのために言うておられるのでしょうか。もちろん、わたしたちのためにそう書かれているのです。耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分け前にあずかることを期待して働くのは当然です」（一コリント 9:7-10）

「あなたがたは知らないのですか。神殿で働く人たちは神殿から下がる物を食べ、祭壇に仕える人たちは祭壇の供え物の分け前にあずかります。同じように、主は、福音を宣べ伝える人々には福音によって生活の資を得るようにと、指示されました」（一コリント 9:13-14）

これらの聖書の教えから明らかになることは、御言葉を語る伝道者がその御言葉を聴く信徒によってサポートされるべきであるという考え方。これこそが教会の自給の基本。

ところが、パウロは、コリントでの伝道に際して、コリントの信徒たちの献金によってサポートを受けることをあえて辞退した。テント造りとマケドニア州の諸教会からの献金。

「わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました」（二コリント 11:8）コリントの信徒たちのサポートを受けないパウロは、他の使徒たちより劣った「愚か者」（二コリント 12:11）である、という誤解までも受けた。

パウロがコリントの信徒たちのサポートを受けなかったのは、信徒たちに負担をかけずに福音を宣べ伝えるためであったが、そのことによって、信徒たちを十分に訓練することができなかったという結果も生じた。パウロは「あなたがたが他の諸教会よりも劣っている点は何でしょう。わたしが負担をかけなかったことだけではないですか。この不当な点をどうか許してほしい」（二コリ 12:13）と謝罪をしている。

## 2. 教会の自伝（セルフ・プロパゲーション）について

キリスト教会は伝道をする共同体。神と和解して救われる道を伝える。

「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」（二コリント 5:19-20）

私たちは救いを求めてキリストのもとに招かれ、ただ信仰によって救いを受けた。しかし、私たちは救いを受けるだけではなく、救いを受けた後に使者として遣わされる。私たちは、キリストの救いをすでに信じている信者と分かち合うだけではなく、キリストの救いを未だ信じていないがやがて信じるであろう未信者とも分かち合う。

「永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った」（使徒 13:48）

19世紀の伝道の歴史を調べると、西洋から来た宣教師が伝道をして人々が洗礼を受け教会が設立されるが、その現地の教会が自ら伝道をする教会になっていかないという現実があった。西洋の宣教団体によって維持される現状に甘んじてしまい、同胞たちに自らキリストの救いを宣べ伝えていく教会として成長していかないという現実を克服するという大きな課題があった。そのような課題に取り組むために、イギリスの聖公会のヘンリー・ヴェンとアメリカの会衆派教会のルーフス・アンダーソンは、海外伝道における教会形成の三つの目標を唱えた。それが、自給（セルフ・サポート）、自治（セルフ・ガバメント）、自伝（セルフ・プロパゲーションまたはセルフ・エクステンション）の教会を形成すること。この三つの目標のなかで、中心となるのは「自伝」すなわち自ら伝道する教会になることであった。

戦前の日本基督教会においては、植村正久の指導のもとで西洋の宣教団体から独立した「自給」の教会となることが強調された。（1905年の第19回日本基督教会大会における独立決議：個々の教会が西洋の宣教団体から経済的に独立することが求められ、経済的独立が不可能な場合は「教会」が「伝道教会」とならねばならなかった。）ところが、日本基督教会における「自給」の強調は、教会を本来のあるべき姿とは違った方向へと歩ませた。植村正久自身が日本基督教会の伝道の現状を深刻に反省して「今の教会は己れを維持する為めに出来て居る。牧師は教会を保つために信者を製造せんと焦慮っている。教会員は自給の材料である。伝道は人の靈魂を救うというよりも、教会維持の勸化である」（筆者註一「勸化」は権化のことか？）と記している。伝道という大目的のために自ら伝道者をサポートする「自給」の教会を形成するのが本来のあり方であるのに、「自給」の教会を維持するために伝道するという目的と手段の逆転が起こってしまった。そこで、植村正久自身も、そのような状況を打破して「自伝」の教会として日本基督教会を建て直す道を模索していた。

伝道所が独立教会となる場合に中心となるべき目標は、何よりも自ら伝道する「自伝」の教会となること。独立教会における牧師の招聘とは、そのような目標のためになされる。「自伝」の教会とは、牧師を招聘して、教会員を養い、未信者に和解の福音を正しく宣べ伝えることのできる教会。

伝道の究極の主体は三位一体の神御自身であるが、三位一体の神は、一つの信仰共同体を、神の伝道の御業に参与する主体として建ててくださる。

### 3. 教会の自治（セルフ・ガバメント）について

日本キリスト教会は、「一つの聖なる公同の使徒的教会に属し、長老制をとる一団の教会」（日本キリスト教会憲法第1条1項）。

すなわち、長老による自治を行う教会。日本キリスト教会憲法第8条1項には「長老は、規則に従い、神のことばのもとに教会を治める務めにつくため按手礼をもって任職された者である」（日本キリスト教会憲法第8条1項）「神のことばのもとに教会を治める」のであって、人間的な意思のもとに教会を治めるのではない。

長老は、神のことばである聖書の内容をよく信じて理解している人でなければならない。

長老は神のことばであるイエス・キリストとの絶えざる交わりをもっている人でなければならない。

長老は「教理を擁護する務め」（日本キリスト教会憲法第8条2項）をも負っているから、日本キリスト教会信仰の告白に表されている正しい教えを理解し、それを守っていなければならない。

独立教会建設の要件「現住陪餐会員の中から長老を選挙し、小会を組織できること」（日本キリスト教会規則第1条1項（1））

独立教会における小会と伝道所における委員会の務めはどのように違うのか？

日本キリスト教会憲法第10条1項に定められた小会の権能

（日本キリスト教会伝道所規程第2条4項に定められた委員会の権能と比較）

小会は委員会にはない「洗礼、信仰告白志願者および入会希望者の試問」「会員の加入、入会・転会、除籍」「会員の戒規」「説教に関する事項」「日曜学校および教会内諸団体の監督ならびに指導」といった権能が与えられている。小会には教会を神のことばに従って霊的に治める権能がある。

歴史的には、長老によって教会を治めるという考え方は16世紀のジュネーブの宗教改革者カルヴァンにさかのぼる。カルヴァンは聖書に教えられている教会の自治のあり方に従おうとした。使徒パウロがエフェソ教会の長老たちに「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです」（使徒20:28）と教えたように、信徒を指導・監督し教会を治める務めを教会のなかに置こうとした。そして、カルヴァンは「よく指導している長老たち、特に御言葉と教えのために労苦している長老たちは二倍の報酬を受けるにふさわしい、と考えるべきです」（一テモテ5:17）という御言葉にもとづいて、「御言葉と教え」を教える長老である牧師のほかに、「教えるつとめを持たないが、威厳に満ちて良く教会を治める者たちがいた。人々は熱心で良く吟味された人々を選び、彼らが牧師たちと共に会議を構成し、教会の権威を帯びて、戒規を行ない風紀を監視したのである」（澤正幸訳）と述べている。

「戒規」とは、信徒や教師を悔い改めに導くための公的な訓練のこと。日本キリスト教会規則第19条によれば、「教会の秩序と清潔とを保つとともに、戒規を受けた者の益をはかること」（同1項）を目的として、「会員の場合は、教会に加入または入会するときの誓約に違反する行為に対して行い、教師、教師試補、長老および執事の場合は、任職または認可を受けたときの誓約に違反する行為に対して行う」（同3項）もの。具体的には、「教戒、譴責、停職、免職、陪餐停止、権利の停止および除名」（同5項）。

公的に「戒規」が実施される前の段階として、罪を犯した人に対する個人的な勧告がなされていることが必要（マタイ18:15-16）。

日本キリスト教会信仰の告白は、教会の本質的な務めとして御言葉の説教と聖礼典とともに「信徒を訓練し」と教えている。この場合の信徒の訓練とは、日常的な悔い改めの指導をも含んでいる。そのような悔い改めの姿勢は、何よりも悔い改めをもって聖餐にあずかることによって養われる。カルヴァンは、教会の長老の務めの中心が信徒を聖餐にふさわしくあずからせる訓練をすることであると考えた。長老はまず自分自身が絶えず悔い改めをもって聖餐にあずかる人でなければならない。長老は絶えず悔い改める謙遜な人でなければならない（一ペトロ5:1-3）。

#### 4. 自給・自伝・自治についての歴史的考察

拙稿「独立教会の形成について --ヴェンとアンダーソンの宣教論--」  
『教会の神学』第19号（2012年）116-135頁

##### （1）ヘンリー・ヴェンの宣教論

ヘンリー・ヴェン（Henry Venn、1796年 - 1873年）は、英国聖公会の教職である。彼はケンブリッジ大学を卒業した後、ドライプールやホロウェイの牧師を務めるかたわら、英国聖公会宣教協会（Church Missionary Society）の総主事（chief secretary）を1841年から1872年まで務めた。ヴェンはアジア・アフリカへの宣教、特に西アフリカの宣教に関心があった。

ヴェンは、「現地の回心者が現地におけるミニストリーを支える」という原則がなされるのが宣教において非常に重要であると認識していた。ところが、ヴェンの主張にもかかわらず、この原則は容易には浸透しなかった。つまり、宣教が進展するにつれ、現地の教理教育者や牧師や学校教師が増えるのだが、それらの人々は皆、英国聖公会宣教協会によって経済的にサポートされていた。そのような事態を克服するために、英国聖公会宣教協会の宣教の原則として、ヴェンは以下の四原則を提案した。

- ① 現地の回心者は、可能な限り早い段階で、自治を行い、彼ら自身の現地の教師をサポートするための訓練を受けるのが適切である。
- ② 献金は、回心者によって、彼ら自身が受けた教育のため、そして彼らの子どもたちの学校のために献げられるのが適切である。この目的のために、一定の宣教地域のために現地教会基金が設けられ、献金が献げられるべきである。その基金は、最初は主に英国聖公会宣教協会からの補助金によって支えられるが、現地の献金が伸びるにつれて補助金が減額されるべきである。その基金は英国聖公会宣教協会からの補助金を受けるのであるが、親委員会（Parent Committee）がその運営方法を監督しなければならない。
- ③ 現地の教師は以下のような二つの種類に分けられるのが適切である。
  - i. 宣教師の伝道活動の補助として雇用される者たち。彼らは英国聖公会宣教協会によって給与を支払われる。
  - ii. 現地のクリスチャンの中で牧会活動のために雇用される者たち。彼らは、学校教師であれ、聖書朗読者であれ、教理教育者であれ、按手を受けた牧師であれ、現地教会基金から給与の支払いを受ける。そして、彼らは英国聖公会宣教協会の有給の受託者ではなく、現地教会でミニストリーを行う受託者とみなされるのである。
- ④ 宣教においてなされる計画は、最初から、外国の援助や監督から独立した土着の司教職による現地教会が最終的に定着することを目指してなされるのが適切である。

ヴェンは、現地教会が最終的にはヨーロッパの教会以上に自ら伝道をなす教会となることを目指していた。そのモデルは、新約聖書のテサロニケの教会であった。そして、現地教会が独立した教会となることにより、宣教師はその宣教地での役割を終え、さらに彼方の地へと前進していくことを願っていた。

## (2) ルーファス・アンダーソンの宣教論

ルーファス・アンダーソン (Rufus Anderson、1796年-1880年) は、米国会衆派教会の教職。アンドーヴァー神学校を卒業した後、宣教団体のアメリカン・ボード (the American Board of Commissioners for Foreign Missions) で働くことを志願し、1826年にアメリカン・ボードの主事補 (assistant secretary) となった。そして、1832年にアメリカン・ボードの海外担当の主事となり、1866年までその職を務めた。

アンダーソンはアメリカン・ボードの主事補となった後、当時のアメリカ人の宣教における一般的な考え方に対する反対の立場を鮮明にした。すなわち、当時のアメリカ人の宣教においては、アメリカ原住民への宣教から受け継いだ「福音化」(Evangelization) と「文明化」

(Civilization) の二つが相互に補い合うという考え方一般的であった。「福音化」によって福音を受け入れれば、欧米以外の人々が欧米人のように「文明化」されるであろうし、そのような人々との接触の最初に「文明化」が強調されれば、人々は福音を理解し受け入れるであろうという考え方。アンダーソンは、このような「文明化」が宣教の目的であるという考え方に強く反対した。そして、宣教の目的を、神との和解のためのキリストの使者としての福音宣教に集中した。アンダーソンは、ある宣教師の任職式の説教において、コリントの信徒への手紙二 5章 20節に基づき次のように語っている。

それゆえ、異教徒への宣教における我々の真実かつ唯一の務めと確信するものに注意を向けよう。「ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。」ここで語られている使者とは、宣教師のことである。パウロやその同労者たちは、そのような者として、仲保者キリストに代わって、天使にすら許されなかった務め、すなわち反逆する人々に神と和解させていただきなさいと訴える務めをもって遣わされたのである。

さらに、アンダーソンは和解の福音を宣べ伝えるという霊的な目的を遂行するためには、その手段もまた霊的なものであるということを強調する。

彼 (宣教師、筆者註) がこの和解の務めにあたって用いる方法も、彼の目標と同じく唯一の霊的なものである。彼はキリストの十字架を宣べ伝える。使徒パウロはこれが彼の最大のテーマであったことを宣言している。そして、近代の宣教師にも同じ結果をもたらす経験があることは注目すべきである。宣教師の最大の手段は口頭で教えることであり、最大のテーマは十字架である。そして、おそらく使徒たちの時代と同じように、聖霊は、異教徒を回心させる影響力を、主としてこの種的手段とテーマに限定しておられるようである。(この見解の根拠となる聖書箇所は明示されていないが、おそらくコリントの信徒への手紙一 2章 1-5節であろう。筆者註)

アンダーソンは、福音宣教とは何かが見えにくくなっていった時代の中で、福音宣教の本質を洞察した。当時のアメリカ人の宣教観の中の「文明化」は宣教地の「植民地化」や「領土化」に

つながるものであった。そのようなものを、アンダーソンは福音宣教の本来の務めとは異なるものであることを見抜いた。そして、同時代の宣教師にキリストの十字架の福音を宣べ伝えるという本来の務めに立ち帰るようにと語った。

アンダーソンが宣教のモデルとしたのは、言うまでもなく、使徒パウロの宣教であった。アンダーソンがパウロの宣教から学んだ点は次のとおり（宣教学者ピアス・ビーヴァーによる）。

- ① キリストの使者であること。
- ② 福音を宣べ伝え回心者を教会へと集めること。
- ③ 地域教会（local church）を建てて長老たち（presbyters）にその牧会をさせること。（この点が最も重要な点、ただし、アンダーソンは、聖書の「長老たち」をそれぞれの群れの牧師として理解している。）
- ④ 特別な靈感や奇跡を行う力にもかかわらず、異常な人物とは見られていないこと。教会の外では近代の宣教師のように評価されていないこと。
- ⑤ 近代のような宣教協会はなく、パウロは異邦人の中で彼自身の労働、個人財産、フィリピ教会のサポートなどによって宣教したということ。
- ⑥ パウロは社会の下の方から上へと宣教したこと。
- ⑦ 「敬虔な女性たち」の存在。
- ⑧ 使徒的教会は近代の教会と比べて完全であったということではなく、優れた点と共に大きな欠点もあったということ。
- ⑨ 使徒たちはローマ帝国の全域で宣教をしたというのではなく、暗闇の中の灯のようにローマ帝国の主要都市に自給、自治、自伝の教会を建てたということ。

アンダーソンはパウロの宣教が教会を建てる宣教であったと理解していた。そして、アンダーソン自身も宣教の核として独立教会の形成をその目標としていた。アンダーソンは、キリストの福音によって異教徒を神と和解させるという霊的な宣教観を保持していたにもかかわらず、宣教の目的を単なる個人救霊に留めることなく、回心者たちによって教会が形成され、その教会がさらに福音を宣教していくことを目標としていた。すなわち、現地の教会が独立教会として建てられることの眼目は、自ら福音を宣教する自伝（self-propagation）の教会となることであった。

アンダーソンの宣教論の根底にあるものは、滅びゆくものの魂を福音によって神と和解させ永遠の命を得させることであった。宣教地における独立教会形成の根底にあったものは、滅びの中にある魂を救うために和解の福音を伝える自伝教会を全世界に形成することこそがキリストの委託である、という信仰であった。そして、このような信仰とその信仰に基づく実践は、世界の教会史において驚くべき実りを生むことになる。すなわち、ヴェンとアンダーソンの独立教会形成の理論は、独自の形で米国人の長老派宣教師ネヴィアスに受け継がれ、さらに韓国・朝鮮の宣教に適用されて、強力な土着化教会（indigenous church）の形成に貢献するに至った。

### (3) ジョン・L・ネヴィアスの宣教論とその実践

ジョン・L・ネヴィアス (John L. Nevius, 1829年-1893年) は、中国で宣教した米国の長老派宣教師。ネヴィアスはヴェンとアンダーソンの宣教論に基づき、多くの教派が中国で展開している宣教団体依存の宣教活動を批判して、現地の独立教会形成に努めた。

ネヴィアスが中国において実践した宣教論

- ① クリスマンは近隣の地域に住み続け、職業をもちながら、同労者や近隣の人々に対して自給で証しをなすべきである。
- ② 宣教団体は国民教会 (national church) が望みかつサポートすることのできるプログラムや組織のみを育てるべきである。
- ③ 国民教会がそれ自身の牧師をサポートすべきである。
- ④ 教会は教会員自身の献金と献品により現地のスタイルで建てられるべきである。
- ⑤ 聖書的・教理的な教えが教会指導者に対して毎年なされるべきである。

ネヴィアスは中国において8年間で60以上の集会 (station 伝道所) を設けて、それらには有給の説教者を置かず、その会員によって集会を維持させた。

ネヴィアスは4名ほどの有給の助手 (helper) をもっていて、それらの助手に各集会の指導者の監督をさせた。

助手の監督の下、各集会は自らの集会の維持だけでなく、「彼方の地」 (the regions beyond) への伝道のためにも献金を献げるように勧められた。しかし、現実にはネヴィアスが願ったほどには献金は献げられなかった。

ネヴィアスは、彼の助手の給与のために献金をするように各集会に呼びかけた。ある程度までは献げられたがそれも決して十分ではなかった。

ネヴィアスは、現地の集会が教会として有給の牧師をもつ場合には、信徒たちがそれを望みかつサポートすることができる場合に限るとした。その理由を彼は以下のように記している。

ここで、我々は、教会の教師は教えを受ける人々からこの世におけるサポートを受けるべき、という重要な聖書の原則に出会う。多くの利点がこの相互信頼の関係から生じる。牧師はその時と力を配慮する者として教会員のために用い、教会員は自然に牧師から教えだけでなく訓戒や叱責をも受けるようになる。牧師が全面的または部分的にサポートを受けているという事実は、教会員には牧師の奉仕を求めることとなり、牧師には職務を勤勉かつ誠実に果たす動機となる。現地の牧師が外国宣教団体によってサポートされている場合には、この牧師と信徒の相互信頼から生じる利点はなくなり、信徒と外国の援助に頼る牧師の間に不自然な一方的関係が入り込み、それは善い作用ではなく悪い作用を及ぼす。

ネヴィアスの宣教方法は中国での宣教において小さな影響しか及ぼさなかった。1890年にネヴィアスは夫人と共に韓国・朝鮮を訪問し、韓国で宣教する宣教師たちと交流をもった。そのときにネヴィアスの宣教方法が韓国・朝鮮で働く宣教師たちに分かち合われて、彼らが「ネヴィアス方式」を採用したことが、その後の韓国・朝鮮の教会の成長につながった。

宣教学者ボッシュによるヴェンとアンダーソンの宣教論に対する評価

「高貴なもの」「称賛に値する理想」であるが、事態は彼らの理想どおりには進まなかった。

理由「彼らの計画が仲間の宣教師によってくつがえされた」

「宣教の目的は教会を開拓し建て上げることであると何度も強調する中に、  
どういうわけか調和を欠いた不適當なものがあつた」

＝福音の前進が「目に見えるものを数えることによって」測られるとして、教勢の拡張を第一とする教勢拡張主義。

ボッシュの見落とししている点

ヴェンとアンダーソンの宣教論がネヴィアスを經由して韓国・朝鮮において結実した事実。

韓国・朝鮮において形成された土着化教会は、単に教勢において数的に成長しただけでなく、日本の植民地支配の中でキリストを告白する信仰告白的教会として成長した。その教会の中において、神社参拝を拒否して信仰を告白する牧師や信徒が育っていった。

#### (4) 植村正久の宣教論について

日本において、外国ミッションの援助を受けない「自給独立」の教会形成を推進した植村正久の宣教は、どのように結実したか？

京極純一の分析「独立の教会」の要請が「独立の神学」の要請となるときに、欧米の神学の学習が強調され、伝道の「志」の再生産ではなく、礼拝と牧会を第一とする欧米の神学を受け継ぐことになった。礼拝と牧会を第一とする欧米の神学を受け継ぐことにより、日本の教会自体が機構管理に傾斜した。

植村正久が強調した「自給独立」も、「教会財政の確立の強調となり、信仰の独立という目的を忘れた自己目的となり、さらには財政の確立のために伝道するという形で、目的と手段の逆転に通じる」

植村正久はこのような教会の機構化の弊害に気づいていた。そして、それを克服するために「小なる町村に起これる信徒の団体にては、その土地に住みて多少の資産を有し今の伝道者の如く俸給にて露命を繋ぐの必要なき有志者をして、その伝道教会の実務に当たらしむべし」という「有志伝道」の必要を説く。

自らは「各地に二三ヵ月ずつ落ちていて、同志の間を奔走し教会を建設さする」「パウロのような伝道」を志す。この「有志伝道」と「パウロのような伝道」は、有給の説教者をもたない多くの集会を宣教師とその助手たちによって監督し育てようとした、ネヴィアスの宣教方法と似た一面をもっている。

「自伝」という概念が独立教会形成の眼目とならなかった日本において、晩年の植村正久は、奇しくも「自伝」を唱えたヴェンとアンダーソンの宣教論に沿う方法で教会の機構化を克服する道を模索していた。

教勢が低迷し伝道者の不足に悩む今日の日本キリスト教会において、教会の機構化の弊害は、植村正久の時代のそれよりもさらに深刻になっている。しかし、教会の自給・自伝・自治について考え直すことによって、日本の地に独立教会を形成する意味が改めて明らかになるであろう。